

派遣国	アメリカ	派遣都市	Waco
出国年月日	2018年2月4日	帰国年月日	2018年3月23日
法政大学との共催団体名（受入団体名）	Baylor University		
主な活動内容	日本文化紹介のプレゼン、授業アシスタント、各 Japanese activity に参加（JSA, JHS）、フィールドワーク他		

1. 活動内容

① 日本語クラスでの活動

月水金は一年生クラス3コマと二年生クラス2コマに、火木は同じく一年生クラス3コマと三年生クラス1コマに参加しました。クラスは各50分、生徒数8～15人ほど、そしてプレフューメ先生と藤井先生のどちらかが担当されていました。私は、生徒が漢字を練習している時に、間違いを指摘したり、ペアワークやグループワークを一緒にしたりしていました。三年生のクラスでは、好きなことわざや四字熟語を決め、その理由についてそれぞれの考えを話し合うようなことをしました。授業の準備を手伝うことはなく、その場で指示を受けました。

授業の中で約5分間の日本について紹介するプレゼンをしました。私は、正月、大学生活、バイトとカラオケ、電車、弁当をテーマで5回しました。すべて英語で行い、最後に質疑応答もしました。



② クラス外での活動

毎週火曜日の16時半から一時間、「お茶の時間」という日本文化交流する時間があり、2回参加しました。それぞれ私が持って行ったカルタや花札を使って遊びました。カルタを知らない学生がほとんどでしたが、ルールは簡単なので、思っていたより盛り上がりました。一方、花札は比較的ルールが難しく、英語の説明書やYouTube等でルールを確認しあうことにかかなり時間がかかりました。しかし、それぞれがかなり盛り上がり意見を交わしており、それもまた楽しんでいました。

ほかに、JSAやJHSという活動に参加しました。主体的に日本文化を理解するための活動をしていました。私は、お好み焼きや恵方巻と一緒に作りました。日本に留学した学生が、まだ行ったことのないほかの学生に、自身の体験などを教えている姿はとても良いものだと感じました。

③ フィールドワーク

調査テーマ：なぜアメリカ人（BU学生）は日本語を勉強するのか？

ベイラーインジャパンに参加する三名と過去にフィールドワークを経験した2名に協力していただきました。私が作成した研究計画書やクエスチョンシート、プレゼン原稿を見てもらい、英語を直してもらったり、クエスチョンの変更など意見をもらったりしました。また、このような調査研究は初めてだったので、一から進め方などを教えてもらいました。彼らが法政大学でフィールドワークをする時、様々協力するつもりです。

私はまず、リサーチクエスチョンを決めることに非常に苦労しました。何度も変更しましたが、最終的に日本語学習者が予想より多かったことに興味を持ち、今回のテーマに決めました。Google フォ

ームで35人に16問の質問に答えていただきました。うち、12人にはインタビュー形式で直接話を聞いて、メモを取りながら、フォームに記入してもらいました。直接聞くことで、似ている回答でもそれぞれ違いが見えてきて、興味深い発見もあり、なにより楽しいと感じました。調査計画書とクエスチョンシートの作成に1週間以上かけたため、実際にアンケート調査に割ける時間が少なくなってしまうことから、より多くの人にインタビューをすることができなかった点を後悔しています。インタビューはすべてレコーダーを使いながら自分一人で行いました。早くて聞き取れないときはゆっくり言い直してもらったり、自分の言葉で聞き直したりして、聞き取れたことがあっているか確認しながら行いました。待ち合わせをして、空いている時間に協力していただきました。質問対象者が日本語クラスをとる学生で、毎日顔を合わせる友達だったので、短期間でもスムーズに終わることができたと思います。

4週目の火曜日に発表の時間を設けていただきました。30人以上の学生に来ていただき、約20分のプレゼンテーションの後、様々な質問を40分ほど受けました。漫画やアニメ以外にも多くの理由で日本に興味を持つアメリカの学生は多く、日本語という言語にも魅力を感じているようでした。自分が英語を勉強している理由とは違うものが多く、面白かったです。



2. 特筆すべきエピソード

友達とのやりとりの中のことです。ヒューストン出身の友達に、日曜日にNASA宇宙センターを見学したいとお願いしてみたところ、「Sunday works」と返事がありました。アルバイトなら、残念だったが仕方ないとあきらめていたら、次の日集合時間の連絡が彼からありました。アルバイトのことを聞くと、Sunday worksは「日曜日は行けるよ」という意味だと教えてもらいました。Workのそのような使い方は、実際にネイティブと会話することで知ることができるものなので、とてもいいことを教わったなと思いました。このことを先生やほかの友達に話すと、みんなに笑われましたが、いい思い出になりました。

3. 苦労したこと

- 最初の1週間は時差ぼけが大変でした。3日目に大寝坊してしまい、先生が心配。インターンシップでお世話になっているのに、大変迷惑をかけてしまいました。短い期間で、時間を無駄にしまったことへの後悔と、申し訳なさでいっぱいでした。
- リサーチクエスチョンを決める際、思い込みで左右されているということを何度も指摘されました。自分ではそうとは思っていないため、先入観を持たずに、ということがはじめは大変でした。アメリカ人はこういう人が多いだろう、といった具合です。

4. 身に付いたこと



今回一番身に付いたのは、プレゼンテーションを作る力です。日本文化の紹介で5回、自己紹介で1回、フィールドワークの発表で1回の計7回プレゼンの中で、先生にも良くなったねと言っていただきました。

文化紹介のプレゼンは、5分間でまとめるのが難しく、不明瞭な発表になってしまっていました。先生にも「下手だね」と言われてしまいましたが、同時にコツを教えてもらい、かなり良くなりました。「一つのスライドにつき3文程度で、何を伝えたいか分かりやすく書く。」このことを意識して作るようになってから、うなずいたり笑ったりするようになり、質問も増えました。言いたいことを理解してもらっていると感じながら、コンパクトに作れるようになりました。

5. 今回の経験を経て感じる「グローバル人材」像とは何か

これはプレフューメ先生がおっしゃっていたことですが、先生の上司の方と話すとき、ニックネームで呼びかけるそうです。日本では考えられませんが、アメリカではむしろ普通のことのようです。先生もはじめは慣れずに、サーネームで呼びかけていたそうです。日本のように目上の人を敬う呼びかけやアメリカのようにニックネームで呼び合うことは、それぞれに良さがあると思います。さて、先生方のオフィスにはほかの言語を教えている先生もいらっしゃいますが、そのうちのある先生は、プレフューメ先生の部屋に入る時に毎回、「どうぞ」といって入っていました。（普通入室時は失礼しますといいますが、その先生はそのことを知らなかったようです。）その先生は日本人の先生と同じ場所で働いているだけですが、日本人が他の方の部屋に入室する際に断りを入れてから入ることを真似していました。自国とは違う文化圏に住む以上、多くはその様式に倣う必要はあるでしょう。しかし、この先生のように身近な人の文化や言語を理解し実際に真似してみようという柔軟な考えは、グローバルに働くうえで大切な姿勢だと思いました。グローバル人材には、相互に異なる文化・考え・言語を受け入れ発信することが必要な要素だと考えます。



6. 後輩へのメッセージ

まずこのプログラムを通して、法政大学の林さんに村田先生、ベイラー大学のプレフューメ先生に藤井先生には大変お世話になりました。特に授業外でも常に忙しい中、早くなじめるように私のことを気にかけてくださり、プレゼンやフィールドワークのことで相談にもものっていただきました。先生方には本当に助けられました。周りの方々に支えられていることを再認識できると思います。

次に自分は留学生ではなく、インターン生として行っていることを自覚することです。授業にどのように貢献していくか、自分に何ができるかを考えていく義務があると思います。法政大学の代表として、また来てもらいたいと思ってもらえるようにしたいですね。それは、将来仕事に就いたときの自分のためになると思います。

最後に、ベイラー大学の学生がとにかく一生懸命勉強している姿に、法政大学の学生との違いを感じるかもしれません。この国際インターンシップに参加される方は、少なくとも自分で将来を考えられる人だと思います。しかし、大学生として毎日、バイトをする暇もなく宿題や勉強に励むベイラーの学生に囲まれることで、もう一度自身の大学生としての生活を見直すきっかけになるのではないのでしょうか。

